

横着者の話

隠岐郡隠岐の島町郡

令和3年10月5日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 塩山コフエさん・明治42年生まれ
収録・昭和54年8月9日

あらすじ

昔、毎日何もせず、遊んで行かれることはないかと考えていた若者が、山奥の山の神様にお祈りし「三週間参りますすけん」と、毎晩丑の刻に起きて川で体に水をかけて清めて参ったそうなの。

山の神様が出て来て「三週間、寂しい山道をよう来た。おまえの願いをかなえてやる。明日の朝、船が来ても一番初めや二番目の船にも乗んな。三番目の船に乗れ」と神様が言った。若者が「ありがとうございます。どうぞお願いします。」

神様はすうっと消えてしまった。若者は、喜んで帰ったそうなの。他の人が寝ているとき川で待っていたら、船がギーコラギーコラ来た。初めの船や二番目の船には乗らず、三番目の船に乗った。とてももてなしがいい。お茶を飲んだり、ご馳走を食べていると竜宮みたいなきれいな城のどこへ着いた。

馳走を毎日出してくるのでそれを食べたりいろいろな景色のところを見せてもらっ

たそうなの。

そこには大きな屋敷があった。倉が九つもある。「この倉に何が入ったか見たい」と言うのと、「宝物がどっさり入ったつて、見せてあげます」と八つまでは見せたけれど、九つめの倉は見せない。「これだけは見せることはできない」と言う。

その晩、倉が気になって、どうでも見てやろうと、みなが寝た時分、そと倉の戸を開けたら開く。下には大きな洗面器があり、上には人間を吊り上げて、矢が刺してあった。血が洗面器に落ちてくる。

「こりゃたいへん。われもここにおつたら殺される」と思ったら、上に吊り上げられた男が、「ここまで来い。おまえに言わんならんことがあつけん、教えてやっけん」と言う。その男はもう息絶え絶えなから。「われは、おまえと同じやあに、神様に頼んでこんな目にあつた。おまえはこの後ろに一本道があるから急いで逃げ。」

その男は一生懸命でその道を行ったら、寺が一軒あつたそうなの。

「和尚さん、明日からは一生懸命で働きます、どうぞ助

けてやってください。」と言ったそうなの。

追っ手は鬼を使っているところであり、今までご馳走してくれたのは、人々を肥えさせて、その人間の血を吸っていたところだ。

若者の言葉を聞いた坊さんが、「早くこの行李へ入らっしゃい。助けてあげる」と若者を行李に入れて天井に吊るして隠し、追っ手を追い払うことができたそうなの。

男は助かって、それから心を入れ替えて、村一番の働き者になったということだそうなの。

解説

隠岐島前高校(当時)の山岡雄一郎教諭が聞かれたもの。この話は本格昔話で逃竄譚の中にある「脂取り」として登録されている。類話は松江市北堀町の川上静子さん(明治33年生)が語り、現在、出雲かんべの里民話館で語りをしている孫娘の山田理恵さんに伝えられている。これは楽をして暮らしたいと思う人間の願望が生み出した話なのであろう。(元島根大学法文学部教授)

